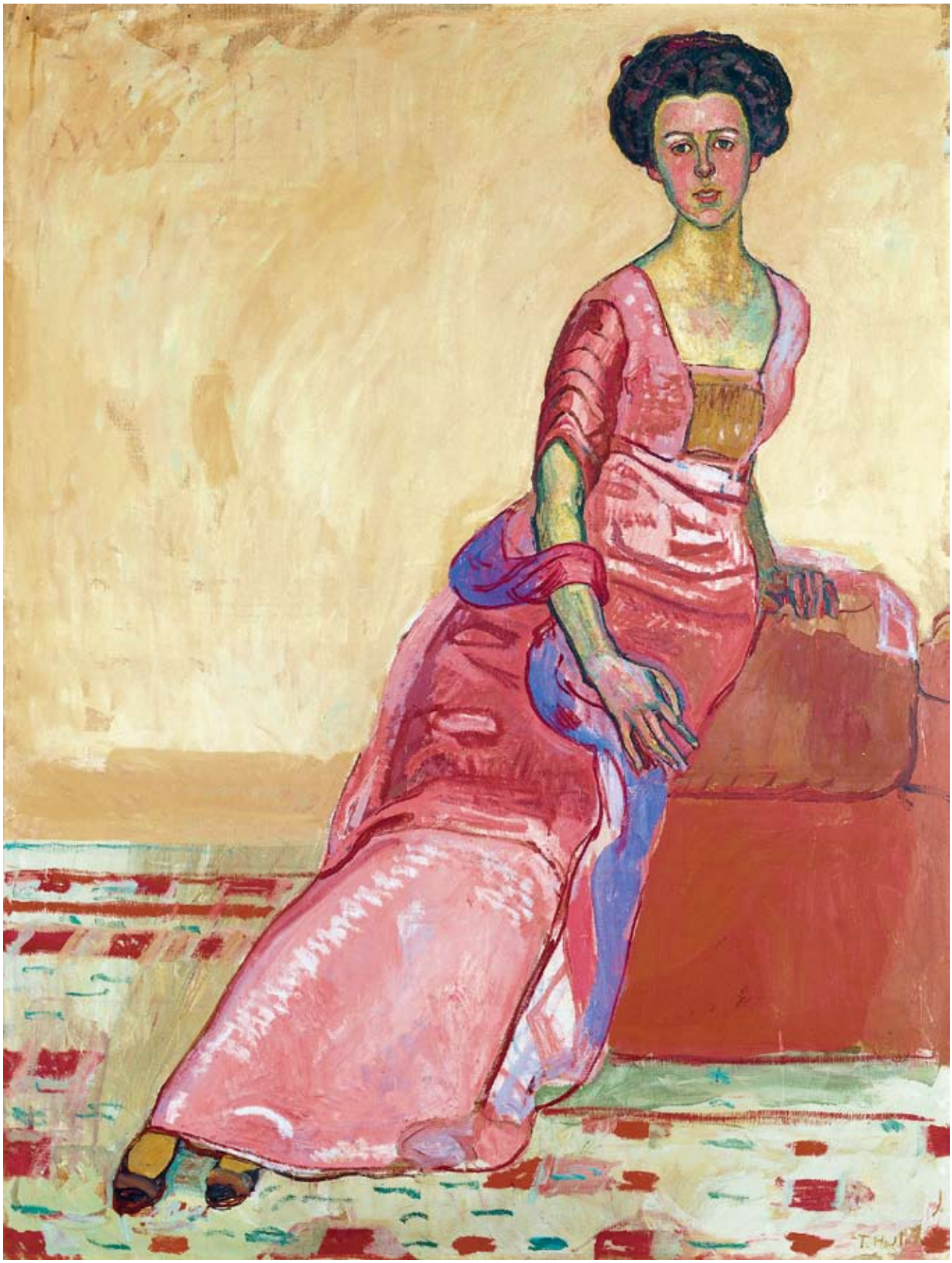
月刊ウィーン GEKKAN-WIEN

Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年　創刊30年目　Nr. 341
2018年1月号



Ferdinand Hodler (1853-1918)　Bildnis Gertrud Müller　1911　© Kunstmuseum Solothurn, Dübi-Müller-Stiftung

レオポルト美術館「フェルディナンド・ホドラー」展にて1月22日まで展示

杉本純の 原子力の話 II ウィーンと京都 74

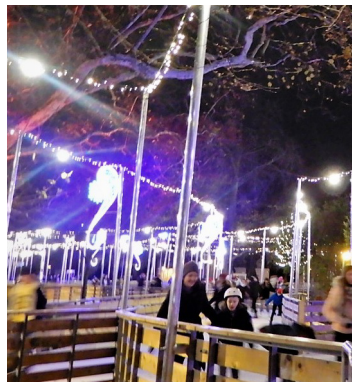
筆者が勤務する東京工業大学グローバル原子力安全・セキュリティ・エージェント教育院は、文部科学省の支援により「核拡散、核テロ、大規模な原子力災害や緊急被ばく問題等のグローバルな原子力危機」の分野において、国際的リーダーとして活躍する人材を育成することを目的として、平成二三年度より修士・博士課程一貫の学位取得プログラムを実施している。このプログラムは、深い専門性はもとより、幅広い社会性や国際性、さらに豊かな人間性を養い、時代の流れを俯瞰しながら、「高い志を持って、人々、社会、および世界のために貢献するリーダーを育成する」ことを教育目標としている。学生は全寮制の「世界原子力安全・セキュリティ道場」に入門し、一部の教員も学生とともに住み、学生が互いに切磋琢磨する教育環境を整えている。この活動の一環として、内外の専門家による道場講話を公開で開催している。

平成二五年一月の第一回道場講話では、伊賀東工大学長（当時）より、「チャンスを生かす二五の法則」と題する講演が行われた。その後、平成二九年十月までに、原子力技術、福島原子力発電所事故、原子力・エネルギー政策、外交、リーダーシップ、先端工学、国際協力、人材育成など幅広いテーマについて、国内十九名、外国十一名の専門家による計三〇回の道場講話が開催された。十一月には元国際原子力機関事務局次長の谷口当教育院特任教授より「大局観を持つグローバル人材を如何に育成するか」、十二月には元国際原子力機関原子力発電部長・原子力委員会委員の尾本同特任教授より「原子力発電のこれから」と題する講演が行われた。講演は質疑応答を含み一時間半であるが、毎回、道場学生からの活発な質問、コメントがあり、討論を通じて、専門家より様々な観点から深く勉強できる貴重な機会となっている。（本文、写真とも写真中に記載のurlより）。

http://www.dojo.titech.ac.jp/

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市のスケート場について述べてみたい。ウィーンのスケート場と言えば、市庁舎前広場に一月から三月まで出現するアイスドリームであろう。このリンクは世界で最も美しいアイススケートリンクと称されている。総面積は八千五百平米で、市内最大のウィンタースポーツ・プログラムである。林の中を大小のスケートリンクが氷の道で繋がっていて移動するのが楽しい。有機食材によるスナックや、ポンチ酒、紅茶やハーブティーなど、暖かいドリンクなどを提供する多彩なスナックスタンドとテラス付アルムヒュッテもオープンし、夢の世界が広がる。夜は二三時までオープンし、八〇～九〇年代のヒット曲やワルツの調べが流れるなかスケートが楽しめ、日没後には一層ロマンチックな雰囲気があたりを漂う。

一方、京都では、西京極運動公園内に冬期はスケート場、夏期はプールを兼ねる京都アクアリーナが二〇〇二年七月にオープンした。公園と調和する外観デザインの地上五階建て、壁面や屋上緑化など環境に配慮した設計である。京都府内唯一の屋内スケートリンクであり、アイスホッケーやフィギュアスケートなどの競技も可能である。このリンクで滑った中京区出身の宮原知子さんの平昌オリンピックでの活躍を祈りたい。四〇年以上も前の話であるが、一九五三年～七四年には左京区岡崎にキョート・アリーナという屋内スケート場があり、一般の他、関西の大学のアイスホッケーリーグ戦なども行われていた。京都市美術館の北側に今もある喫茶店「アリーナ」はその名残である。両市のスケート場は、昔から市民に親しまれていることが共通している。



余談であるが、筆者は市庁舎前広場のアイスドリームを一度だけ楽しんだことがある。何とも言えぬ爽快感があった。キョート・アリーナには、京大アイスホッケー部に所属時、約半年間お世話になった。両市のアイススケート場を紹介できた幸運に感謝しつつ、編集部に撮影をお願いしたアイスドリームの写真を掲載させていただく。

■杉本純　前京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長■